

宇都宮城の調査と復元

「数多くの遺構の発見」

宇都宮城（宇都宮城址公園）の発掘調査は、平成元年から始まりました。

地下には、古代から現代に至る数多くの遺構（建物の跡等）が埋もれていました。

最も古いものは、古代のたてあなじゅうきょ竪穴住居でした。宇都宮城が築かれる前にもこの付近で人々が生活していたことが分かりました。

城の遺構として一番古いのは、13世紀の後半ごろの堀でした。つまり、鎌倉時代の半ばごろには、この場所にお城があった事がわかりました。

伝承では、宇都宮城はふじわらそうえん藤原宗円によって11世紀に築かれたとされていますが、その時代にさかのぼる遺構は発見できませんでした。

宇都宮城の築城は、本当は鎌倉時代であったのか、それとも、鎌倉時代よりも前の遺構は、まだ調査されていない場所の地下に今も眠っているのか、どちらかであると考えられます。

鎌倉時代の遺構があったといっても、全体からみればその数はわずかです。遺構が増加するのは、室町時代の後半、15世紀になってからです。

（つづく）

宇都宮城の調査と復元

「堀から見えてくること」

室町時代から戦国時代にかけては、宇都宮城の遺構の数が増加します。

建物が増加し、建て替えもたびたび行われています。また、井戸もたくさん掘られています。これは、城の中にさまざまな機能をもつ場所ができ、いろいろな用途の建物が建てられていた可能性を示しています。

特に、堀は深くかつ広くなり、一部には水をたたえた水堀が出現します。さらに、何度も堀の作り変えが行われています。

これは、宇都宮城をめぐる数多くの戦いが行われたことによるのではないかと考えられます。そのときの敵味方の軍事力や戦闘の状況などによって、堀の位置や規模をたびたび変更する必要があったのでしょう。

当時の記録にも、宇都宮城を舞台とする戦いがあったことや、宇都宮城が壬生氏や那須氏に奪い取られたことなどが記されています。

地下に埋もれていたこれらの建物跡や堀は、当時の混乱した世の中の様子をあらわしているのです。

(つづく)

宇都宮城の調査と復元

「宇都宮城と絵図」

中世の宇都宮城については、具体的な姿を記録した絵図面や文書は存在しません。発掘調査は宇都宮城址公園内を中心に実施され、中世の城は現在の公園の中だけでなく、市街地の広い範囲にも広がっていることが分かりました。しかし、市街地での発掘調査にはさまざまな困難があり、中世のお城の全体像を描くまでには至っていません。

時代がくだって江戸時代になると、数多くの絵図が残されています。また、文章での記録も中世に比べればはるかに多く残っています。

年代が分かっている絵図で最も古いものは、1650年ごろのものです。この絵図では、一部の堀が未完成である様子が描かれています。しかし、1663年のものとされる絵図では、堀はすべて完成し、その後幕末まで続く城の構造がほとんど描かれています。

従って、江戸時代の宇都宮城は、17世紀の前半から大規模な修築が行われ、17世紀中ごろには完成したと考えられます。

江戸時代の宇都宮城は、本多正純が1619年から1622年にかけて作りあげたとされています。大規模な工事は確かに17世紀前半に行われていますが、最終的な工事は17世紀中ごろまでかかっていたのです。

(つづく)

宇都宮城の調査と復元

「宇都宮城の復元範囲」

現在，宇都宮城址公園に復元されている建物などは，絵図面などの資料調査の結果と，発掘調査で出土した遺構をもとに検討を行い，復元したものです。

宇都宮城は長い歴史をもっていますので，時代によってその姿が異なります。そこで，どの時代の姿で復元するかが問題でした。検討の結果，復元のためのデータがそろっていて，かつ本丸御殿などが存在していた江戸時代中ごろで復元することになりました。

宇都宮城址公園の敷地は，江戸時代の本丸のほぼ西半分にあたります。そこで，その範囲に含まれる堀・土塁の一部と，清明台・富士見櫓という2基の櫓，そして土壁の一部を復元することにし，本丸の南北にあった門（清水門と伊賀門）は敷地外にまたがることから復元しないことにしました。

復元に当たっては，可能な限り江戸時代の規模・構造で行うこととしましたが，資料で明確に分からない部分については同時代の各地の建築物などの実例を参考にしました。また，実際の設計に当たっては，法律に基づくとともに，宇都宮城址公園に求められている機能などを勘案することとし，必要に応じて現代の技術を応用することとしました。

（つづく）

「宇都宮城の調査と復元」

「宇都宮城の土塁」

復元に当たって、最も検討が必要だったのは、土塁と堀です。

本来の土塁は、土を固くたたきしめながら少しずつ盛って作ります。しかし、そのやり方は、現代の工法では非常に困難であるとともに、法令上もその上部に^{やぐら}櫓などの建築物を建てることはできません。したがって、外観と規模は江戸時代と同じにしましたが、構造はコンクリートで作りました。

堀は、もともとは素掘りで土の壁が露出していました。本来の規模は、幅が20メートル以上、深さは6～7メートル、水深は約3メートルありました。復元では、破壊を防ぐため、壁をコンクリートで覆い、安全のため堀の幅や深さも小さくしました。

土塁上に復元された^{せいめいだい}清明台・^{ふじみやぐら}富士見櫓という二つの櫓と土塀は、保安や利便のための施設を付加した以外は、残された資料や各地の江戸時代の建築物の実例をもとに検討した内容で作ってあります。

外観と規模については当時の記録を、構造や材質については各地に残る城郭建築の実例を参考にして設計しました。瓦は発掘調査で出土したものの意匠で製作しました。

(つづく)